

# 「港湾問題研究」

——大都市港湾問題——

齊藤圭太郎  
(神戸市港湾局)

本書は、東京港港湾問題研究会の第2号として発刊されたもので、副題にもあるように現在、社会的にも大きな注目を集めている大都市港湾問題を共通論題として取りあげるとともに、自由論題5編を併せて掲載した最近まれにみるユニークな研究誌である。

最近、港湾を取り巻く社会的・経済的変化の急速な進展には、目を見はるものがある。この急激な変化をどう受け止め、それにどのように対処して行くかが、各港の差し迫った重要課題となってきた。

本著では、各港で発生する諸問題は、当該港湾に従事する人々を中心となってその問題の特性をよく理解し、問題を深く掘り下げ、自らその問題の解決策を見い出していこうとする気概が随所で感じられ、読者を引き付けずにはおかない。

また、今期の同研究会の活動で特に注目されるのは、『東京港におけるはしけ運送の問題点と対策』という共通テーマで、パネル・ディスカッション形式で討議していることである。そこには、問題解決への新しいアプローチが試みられており、その研究成果が実のある解決策への足がかりとなることを、関係者にとっては大いに期待されるところである。

以下、本書の内容を簡単に紹介してみたい。

## 本書の構成

序	北見俊郎
共通論題(大都市港湾問題)	
大都市港湾の理論と政策	北見俊郎
大都市港湾計画試論	今野修平
大都市港湾としての東京港における港運業	関谷義男
大都市港湾と「港湾労働問題」の展開	玉井克輔

——都市問題から港湾問題への覚え書——

物資別公共専門埠頭について 山本 和 夫

——大都市港湾における埠頭経営問題——

### 自由論題

機械化近代化基金と港湾労働 喜多村 昌次郎

——P. M. A と I. L. W. U との協定を中心として——

港湾運送業の体質 重岡 早見

——東京港の港運近代化に関する覚書——

専用埠頭の問題点 窪田 正作

——鉄鋼埠頭を中心として——

現状における大都市交通の諸問題 山村 学

——過密化問題を中心に「大都市港湾」への論及課題を模索する——

東京港における内航海運の現状と諸問題 土居 靖範

### 研究会活動記録

月例研究会, パネル・ディスカッション, セミナー, その他

### 編集後記

北見氏の論文は、大都市港湾は如何にあるべきかの基本的理念の問題を、欧米の港湾と対比させながら興味ある分析を行っている。

まず、第1節では、日本の港湾は「公物思想」に基づき発展したが、それは時代的要請であり、歴史的必然性もあつたことを指摘し、日本における将来の港湾のあり方は、“伝統的な「公物思想」の諸問題を整理し、「人間」を中心とした港湾体制”，つまり、都市、地域、経済、市民等と密着した新しい立場にたつた発想の転換の必要性が強調されている。

また、第2,3節では、欧米と日本との大都市港湾を比較しながら、我国では都市と港湾が機能的に結ばれていないことを指摘するとともに、前記に述べた日本の特性故に、港湾管理者の主体性や地域住民等によって構成される立体的な体制の近代化の未成熟な状態を生じさせていると指摘している。

最後の第4節では、大都市港湾における理論と政策の諸問題を取り上げ、『地方公共団体が港湾の管理主体になるためにも、財政面の確立と行政的権限の課題の解決が望まれる』と述べている。

今野氏の論文は、今後の港湾計画論は、如何なる観点から進めるべきかを述べた政

策型の論文である。

まず、第1節では、従来の港湾計画論が機能的視点からの都市の把握であったことを指摘し、これからは市民の立場の視点に立った計画論の必要性を説いている。

また、第3節では、大都市港湾の特性を踏えた計画論上の留意点として 1)都市の性格を把握すること、2)都市的生活が成立できるようにすること、3)大都市港湾と都市交通とを直結すること等、主として物的な側面から述べている。

第4節では、大都市港湾計画における課題を取り上げ、1)人間環境計画論としての人間中心の視点からの計画論の体系化、2)新しい発想に立った「大都市港湾」の理解、3)港湾管理への市民参加等、主として人的な側面を中心に述べられている。

同氏の論文は、全国的に進行した環境破壊を教訓としながら、「開発と環境保全」との関係は如何にあるべきかの問題と真正面から取り組んでおり、新しい価値観に立った論述が内容を新鮮なものにしている。

関谷氏の論文は、港湾運送事業者の立場から、主として東京港における同業界のおかれている現状や問題点、さらには今後のあるべき姿等について豊富な資料を交えながら言及している点で注目に値する。

第1,2節では、まず『東京港を大都市港湾として見ると、他港には見られないいくらかの特色を有している』と指摘し、主に横浜港と比較しながら詳しく論述している。

第3節では、東京港の港運業者の特徴として、1)舄基盤であること、2)取扱貨物は、内質貨物が圧倒的に多く、且つ外質貨物はF. I. O貨物が大部分を占めていること、3)商社、メーカー等荷主に対する従属性が強いこと、4)事業規模が小さいこと、等を指摘している。また、行政当局に対しては、『港運行政の指導に当る場合、港毎の特殊事情を考慮すべきである』と強調している。

第4節以降では港湾運送業の将来の問題を取り上げ、『都の進める整備計画や輸送革新の進展にも対処するとともに、従来の舄基盤からターミナル・オペレーターに脱皮して行くべきだ』と主張している。

同氏の論文は、港運業者のおかれている現状を的確に分析し位置づけた上で説明を行なっているので、説得力のある内容となっている。

玉井氏の論文は、大都市港湾と港湾の労働問題とを、明治時代から今日に至る歴史的な発展過程と関連させて、かなり突っ込んだ分析を行なっている。

第1,2節では、都市問題を都市や港湾の発展過程と照応させながら、詳しく述べられており、多数の古い文献を丹念に調べられた労力に敬意を表したい。第3節では、戦後の港湾労働者の供給源が各地のドヤ街であることをまず述べ、『港湾労働が政策対象に取り上げられたのは1965年の港湾労働法の制定以後である』と説明している。また、港湾労働も荷役の機械化、海上輸送手段の激変等によって、『従来の前近代的な縦の人間関係は稀薄になりつつあり』、また、『重筋労働が機械労働に変わりつつある』ことを指摘している。

同氏は、最後に、今後の港湾労働問題を解決するには、『住宅を始めとする福利厚生施設の拡充、組織的・計画的な教育訓練の実施が重要となってきた』と結論づけている。

山本氏の論文は、物資別公共専門埠頭の問題を埠頭経営の問題として捕え、実務家の立場から具体的事例を取り上げ、かなり突っ込んだ分析を試みている。

第1,2節では、まず、港湾整備の方法には3つのパターンがあることを説明し、これらの整備方式と物資別専門埠頭とのかわり合いを述べている。第3節では、そのうちの特別整備事業方式を核とした経営・財務の諸問題に触れ、新しい埠頭経営には、『物資の所有者又は荷主の参画の重要性』を強調している。

第4節では、その他の問題点として、港湾労働問題、港湾運送事業の近代化、物価の抑制・安定性等を列举し、『今後の大都市港湾は、背後の市民福祉の向上に貢献するものでなければならない』と結んでいる。

同氏の論文は、今まで明らかにされていなかった埠頭経営の諸問題を、港湾管理者の立場からかなり具体的な説明がなされており、今後の公共埠頭経営の指針となりうる十分な内容を有している。

喜多村氏の論文は、アメリカにおけるPMAとILWUとの間で締結されている「機械化・近代化基金」協定の性格や内容について詳しい紹介を試みている。

最近、我国でも輸送革新の進展に併せて「メカニカル・ファンド」の問題が港運業者と労働組合の双方から提起されてきている時だけに、この報告は時宜を得た貴重な報告である。

まず、第1,2節では、「機械化・近代化基金」協定の設置根拠やいきさつを記述している。第3節では、同協定の内容について、1960年と1966年とを比較しながら、主要な改正点をわかり易く解説するとともに、第4節では、ILWUの対外的な交流状

況の紹介や労働条件の改善をめぐる行なわれた主な労働争議を紹介している。第5節のむすびでは、我国の問題に立ち帰り、『我国の場合、米国に見られるような「労使関係」が確立されていない現状では、「メカニカル・ファンド」の存在意義そのものをあいまいにし、実現を困難なものにしている』と指摘している。

最近の時代の流れの急速さには目を見はるものがある。同氏の当論文発表後の1972年2月には、PMA と ILWU との間で、新しい協定が締結されている。同氏によって、この新しい協定内容が紹介されることを期待してやまない。

重岡氏の論文は、港湾運送事業における近代化の問題を、生産手段との関連で解明している。とくに今後の近代化の方向は、輸送構造の変化、将来の“港湾計画”等に、対応できるものでなければならないとしている。

第1,2節では、物流革新は、港湾運送そのものを変えようとしていることを説き、『現在のように生産手段をはしげや荷役労働者に依存する限りでは、「近代化」すること自身困難である』と説明している。そして、第3節では、『企業の生産機構の構造的な変革と産業経済の求める運送用益を供給できる体制を整える必要』を強調している。

第4節以降では、港湾運送事業の近代化の方向として、兼業化、異業種産業間の共同出資会社の設立、ターミナル・オペレーターへの転進等を強調するとともに、『港湾という物流のノードを、自ら近代的な輸送システムとして需要に答え得るものを作り出してゆくことが真の近代化への途であろう』と述べている。

窪田氏の論文は、今後の鉄鋼埠頭のあり方や現在当面している諸問題を、東京鉄鋼埠頭を例に取り上げて突っ込んだ分析を行なっている。

第1,2節では、まず東京鉄鋼埠頭が、公益的性格の強い体質故に、民業圧迫の問題とか、荷役作業能率の低下等種々の問題点が生じてきていることを述べている。

第3節では、作業合理化の問題にふれ、『荷役作業を効率的に行なうためには、積荷情報の確実な入手と本船積載貨物の集約化が重大である』と指摘している。

第4節以降では、料金体系の今後のあり方として、1)接岸荷役料金 2)元請料金 3)中継料金、の3つの料率の適正化を述べ、いくつかの新しい提案を行なっている。ここでは、現行料金の不合理な点や改善されるべき点をかなり明確に述べているのが注目される。

同氏の現状を踏まえたいくつかの提案は、読者を納得させずにはおかない豊富な内

容を有している。

山村氏の論文は、現在大都市が当面している交通の諸問題を、海上輸送、旅客輸送、貨物輸送、航空輸送等それぞれの分野から、問題点を掘り下げている。

第1,2節では、交通の過密化現象を具体的な例を上げて説明したあと、この原因は、『都市のもつ社会的特性や都市機能の限界を無視して、経済活動の拡大化を計っている巨大産業資本側にある』と指摘し、政府の経済政策を批判している。

第3節では、旅客交通や貨物輸送の現状について東京を例に上げ、欧米の経済学者の主張する交通論の考え方を紹介しながら、今後の大都市交通の政策のあり方を述べている。

第4節では、大都市交通政策についていくつかの提言を行なっている。ここでは、『市民参加による都市交通計画の立案、産業優先から人間優先への発想の転換なくしては、問題の解決はあり得ない』と主張している。

土居氏の論文は、港湾サイドから見た内航海運の現状と諸問題を豊富な資料をまじえて論述しており、今までこの種の問題を港湾サイドから分析があまりなされていないだけに、貴重な報告である。

第1節では、東京港の貨物流動において内航海運の果している役割の大きいことを、海運の依存率を例に取り上げて説明するとともに、『東京の陸上輸送が限界に達していることを考えると、今後ますます海上輸送の重要性が増してゆくだろう』と指摘している。

第2節では、東京港における内航輸送の特質を論述している。ここでは、まず、移出入貨物の割合、主要品種の特色、輸出入経路の状況等を説明するとともに、内航海運業の経営上の問題、不定期船と機帆船が主流を占める入港船舶の特徴等を説明している。

そして、第3節では、最近の輸送革新に代表されるコンテナ船、フェリー、ブッシャー・バージの問題を取り上げ、それらの最近の動向や港湾に与える影響等を詳しく説明している。